祝辞 ── 歴史に刻まれる岡村さんと会員の尊い闘い

石原慎太郎 東京都知事

お招きをいただきありがとうございます。10周年記念でおめでとうございますと言いたいところですが、そういうことはできません。普通の国であればあって然るべきものが、皆さんの力でようやく成就してきたということだと思います。この運動の推進者である岡村弁護士と私は同世代であり、また同窓のひとりです。卒業生の数は国立大学ではきわめて少ない中、多士済々ございまして、岡村さんも優れた弁護士として活躍しておられました。私が彼とはじめて仕事をしたのは、私が運輸大臣をしていたときのことです。当時、岡村さんの郷里である土佐の高校の生徒が、上海で列車事故に遭いました。岡村さんはこの事故の補償交渉の弁護士を務め、私にいろいろ相談をされ、それ以来、親交を持つようになりました。

それからさらに時間が経ち、あの恐ろしく忌まわしい事件が岡村さんの身に起こった。奥様がご主人の代わりに殺されてしまった。その後、岡村さんがこの運動を展開されるようになって、数年経ってから述懐されたことがあります。「石原なあ、俺は妻がああやって殺されなかったら、今頃、それまでと同じように当たり前に加害者の弁護士をしていたに違いない。妻のおかげで新しい弁護士として、司法人としての自覚ができたんだ」

そのとき私は感無量になりました。飢えて人をやたらと食い殺す虎の話が、お釈迦様の教えに出てきます。お釈迦様自身が化身となって、虎に我が身を食べさせて飢えを抑えるという話でした。まさにそれと同じように、岡村さんの奥さんは菩薩の化身だったのではないか。また、それに賛同されて人間にとって本当の人権のために戦っておられる皆さん、それぞれ被害に遭われた方がいらっしゃる。その方々すべてが、きちんとした人の道を立て直していくために身を以て犠牲になった菩薩ではないかと思います。また、そう思わなければ、この運動に対する励みも出ませんでしょうし、それではじめて自分に不可知なものとして与えられた宿命を知ることができるのではないかと思います。

その後、ここにおります私の年来の親友で、首都大学東京の理事長をしている高橋宏くんと諮りまして、「とにかく岡村を援護しようじゃないか」と同窓会館で、そのとき経団連の会長をしていたトヨタの奥田社長も加わってくれまして、百人近くの幹部とで岡村さんの話を聞きました。岡村さんの被害は皆さん承知していましたが、そのとき、たまたま東名高速の出口で飲酒運転のトラックに追突されて、お子さん2人を亡くしたという方の無惨きわまりない話がありました。捜査をしている警察が、どう考えても杜撰というのか、加害者に対しては親切で、被害者は考えられないような扱いを受けているという挿話が披瀝されましたときに、私たちは暗澹とした気持ちになり、慄然として強い問題意識を持ちました。

以来、私たちはたいしたことはできませんでしたが協力をして、岡村さんが孤軍奮闘し、皆さんが団結することで今日、こうしたしっかりした組織ができました。その過程で、私は岡村さんからいろいろと話を聞きました。その中で「近代刑法がそもそも誕生したのは、中世まで続いていた復讐を禁じるためだ」という話になるほどなあと思いました。中世までは当たり前であった復讐の正当性を、ルネサンス以来、人間の歴史を染め変えたヒューマニズムが否定して、ひとつの方式を整えた。歴史の流れとしてそれは納得もできますが、しかし、皆さんの胸に恐らく鬱々としてあるであろう憎悪に近いエネルギー、それを人間が操る法律というもので裁いて刑を下す。しかも人権というものを過剰にとらえて、今日まで被害者がないがしろにされて加害者の人権ばかり尊重されるという、滑稽を通り越して理解ができない現象がまかり通ってきました。人間がやることですから、当然歪みはあります。そういったことを法律の専門家である一部の弁護士さんたちが維持し守ろうとする中で、被害者という限られた方々が、人間としての当然の心情を冷静に抑えて、法律の枠組みの中でいろいろ改善していこうとされた。これから起こりうる事件の将来の被害者のために協力されている。誰もやらなかったことをはじめてやっておられる。こういう尊さは歴史に刻まれて残るものだと私は思います。

岡村さんが、皆さんと語らって行った仕事は、日本の歴史、法律の歴史にとどまらず、社会全体の歴史の中に残る大きなモニュメントだと思います。これをさらにしっかりしたものにしていただきますようお願いいたします。いつどこで何が我が身に起こるかわかりません。しかも社会の風潮を見ます